

連載
第44回

福聚山史

池浦 泰憲 文
及川 一晋 編

「日本建築」の祖

辰野金吾（後編）

明治十三年（一八八〇）、工学寮を首席で卒業した辰野金吾は、イギリス、フランスやイタリアを巡り、その三年間の留学を通じて建築家としての土台を築き、日本独自の建築という分野を確立すべく模索していたと前回述べた。

近年「辰野金吾滞欧野帳」なる記録が発見され、金吾がこの三年間の留学の中で、何を観て、何を学んでいたかの一端が知られることとなった。この史料は金吾が留学を進めていく中で、目にした建築物のスケッチなどが描かれているが、金吾がさまざまな建築に関心を抱き、一つの様式に固執せず、柔軟な姿勢をもってさまざまな様式・用途の建築を観て回ったことがわかるという。金吾の師コンドルはイギリスの建築家であり、そのもとで学びイギリスに留学した金吾もその影響を受け、後手がけた旧台湾総督府庁舎（現台湾総督府）に代表される「辰野式建築」様式や、東京駅にもそうしたイギリス建築の影響が色濃いとされている。けれどもその一方で、「辰野金吾滞欧野帳」に残されたスケッチからは、金吾のイタリア建築への関心の高さもうかがえるという。イタリアの建築は、絵画や彫刻などの裝飾が建築に溶け込んで一体をなしており、金吾は建築は建築だけで成

り立っているのではなく、裝飾が不可欠であること、それこそが今後の日本の建築に必要なことであると理解したようである。金吾は帰国後美術としての建築にも注目し、当時同じようにイタリアで学んだ、新進の画家や彫刻家と交流し、それらの美術家を中心となって組織された明治美術会に入会している。西洋の文物が導入され、絵画、彫刻、建築（当時は造家とよばれた）の各部門はそれぞれが確固たる部門として成立しつつあったが、三者を一体のものとしていたイタリアを手本として、日本近代の美術や建築を築こうとする運動に身を投じたのである。

そのような金吾のイタリアでの体験が大きく反映されたといわれる建築が、帰国直後に設計した「銀行集会所」や「渋沢栄一郎」であった。渋沢栄一は日本資本主義の父ともいわれる幕末から大正初期の実業家で、第一国立銀行や東京証券取引所などといった多種多様な企業の設立、経営に関わった人物である。渋沢は明治十七年（一八八四）に銀行集会所（現東京銀行協会）の設計を新進気鋭の辰野金吾に依頼した。この建物は金吾の処女作となり、世に出るきっかけとなった。以降、明治二十一年（一八八八）の渋沢自身の邸宅も含め、渋沢が関係する銀行や会社の建物の設計の多くを金吾が手掛け、前回触れた代表的な建物である日本銀行本店も、渋沢の斡旋によるものであった。この建設工事で金吾は、本店を建築する地盤が悪いので、基礎工事で地下を

通常より五〜六尺下げることが主張し、経費を抑えたい渋沢と衝突したという。金吾は基礎に金を惜しむくらいなら建築をやめた方がいいと主張し、すぐに渋沢も了解したという。さらに明治三十六年（一九〇三）、金吾が東京設計の総責任者となったのも、後藤新平や佐賀時代の師である高橋是清らとともに渋沢栄一の後押しによるものであった。明治の中頃から日本の経済の中心は丸の内に移っていくが、その街作りの多くは金吾の建築家としての技量を評価した渋沢栄一と、渋沢のビジネス街構想に賛同した辰野金吾によって達成されたともいわれている。

ところで、大正三年（一九一四）五月に「法華会」という在家主導の法華信仰グループが結成されたが、この「法華会」の発起者として辰野金吾も名を連ねた。この会は当時の東京帝国大学教授であった山田三良を中心創設され、法華経の教義と日蓮聖人の主張を当時の社会に広めることを目的に、文筆と言論による活動を提唱した会である。金吾は当時各界で活躍していた人物とともに法華信仰を深めていったのである。ちなみに、会を起した山田三良と法華経・日蓮聖人との出会いのきっかけは夫人の繁子にあるといわれるが、この繁子夫人は伊豆葎山の江川家の出身で、金吾の長男で東京大学仏文科の教授となる隆の妻の姉にあたる。

金吾は亡くなるまで赤坂に居を構えていた。家族は妻の秀子、長男隆のほか息子二人、娘一人に恵まれた。金吾は本郷の大学まで人力車で通っていたが、せっかちで他人の車に追い抜かれるとかな

しゃくを起こしたという。また隆には「うちはその頭のいい家系じゃないから勉強しなくてはいいかん」と言い、家では力ミナリ親父で怖かったという。また、土俵が庭にあったほどの相撲好きは有名で、明治四十二年（一九〇九）両国技館を設計し、斬新な初めてのドーム建築が計算通りに完成した際には、一人土俵の上で万歳をしたという。

大正八年（一九一九）三月二十五日、辰野金吾はスペイン風邪に罹り、六十六歳でその生涯を閉じる。最期の時を迎えた金吾の姿を記した隆の「終焉の記」には、臨終の時に臨んで家中の者を集め、病身の半身を起こし、四十年連れ添った妻を「実に汝は善き妻なりき、善き母なりき」と讃え、子、孫、友人、医師、使用人一人一人に感謝の言葉を述べたという。そして双手をかざして万歳を連呼したという。明治の近代化という時代の中で、建築という分野に身を投じ、多くの実績を残した辰野金吾の人生は、多方面にわたる人々との「縁」によって彩られている。金吾自身の「縁を大切にす」という強い思いが凝縮されて、臨終の姿に表れていたのではないだろうか。



金吾と妻秀子の墓碑。金吾は当山三十六世柴田一能師との縁から立正大学の講堂や常圓寺書院の設計にも関わっている。